

神秘主義詩人アッタールに関する現地調査

平成 27 年度入学

派遣国：イラン・イスラム共和国

石川喜堂

キーワード；表現方法、香料、図書館

対象とする問題の概要

サーマーン朝(873-999)以来、ペルシャ文学が復興するなか、12 世紀初頭から神秘主義思想を詩で詠いあげる詩人たちがホラーサーン地方（古くは、イラン北東部とアフガニスタンの西北部とトルクメニスタンの一部を含む）を中心に顕著に現れ始めた。これらの詩人たちは、後世のイブン・アラビー学派のような理論的な神秘主義哲学を構築するというよりは、実生活の中にあるもの、もしくは一般的に知られているものを比喻や物語として用いて神秘主義の境地を巧みに表現した。特に、12 世紀から 13 世紀初頭に生きた神秘主義詩人アッタール(Farīd al-Dīn ‘Attār, d. 617/1221?)は、同時代の詩人たちとは異なり宮廷との関わりを持たなかったゆえに、制約なしに（宮廷に配慮することなく）詩境を表現することが可能であった。実際、アッタールは彼の詩において神秘主義の境地をさまざまな表現方法を用いて表現した。このような表現方法に着目して研究することは、アッタール研究を進める上で重要であるし、神との合一（神に浸透する）という思想上の類似点を持つ神秘主義思想を述べるものたちの違いを明らかにする一助となるであろう。

研究目的

アッタールが表現方法として用いるモチーフは実にさまざまである。それは、動物であったり、装飾品であったり、聖典の登場人物であったりする。それらのさまざまなモチーフにおいて、神を指し示すものとして重要な役割を果たす「香料」というものがある。この「香料」について臨地で調査するのが第一の目的であった。そして、次の目的として語学力向上というものを掲げた。これは、詩のニュアンスを理解するためにはならないものでもあるし、アッタールに関するペルシャ語の先行研究を読むためにも必須である。また、それらの先行研究を収集することも今回の目的であった。さらに、アッタール自体が現地でどのように扱われているかを見るために、ニーシャープールのアッタール廟に行くことも目的に入れた。



アッタル廟

臨地で得られた知見

臨地において、イラン・イスラム共和国の首都テヘランとアッタル廟のあるニーシャープールに滞在した。テヘランでは、「香料」を扱っている「香料屋」と「香水屋」に赴き、アッタルの詩において重要な役割を果たす「香料」である麝香じょこうと沈香じんこうに関する調査を行った。「香料屋」と「香水屋」が現在のイランではどのようなものであり、それらの店で麝香と沈香が実際どういうものかも確かめられた。イランでは現在でも有名な「香料」という言葉も得た。

また、実地調査を行っていないときは、図書館に通い、図書館の辞書を用いてペルシャ語の文献を訳す作業をすることによって、ペルシャ語の語学力向上を実感することが出来た。滞在していた宿の従業員の方からもペルシャ語の会話を少し習い、そして、ハーフィズの詩を暗唱していた宿の別の従業員の方にアッタルの詩を実際に読んでもらい、どのようなリズムの詩か実際に聞くことができた。

一方、ニーシャープールでは、アッタル廟に行きアッタルがどのように扱われているかを見ることができた。現在において、アッタルは彼の墓と一緒に記念撮影するなど、崇敬の対象にはなっていないが、有名であることがわかった。また、近くの発掘現場から、アッタルの生きた時代の街並みの一部を窺うことができた。

他の知見としては、アッタルの詩が『クルアーン』よりも『詩篇』に詩形において近い

ことをカウンターパートになってくださったテヘラン大学神学部のザルヴァーニ准教授に教えていただき、その先生に教えていただいた文献なども本屋で購入することができた。また、アッタールの詩において「香料」と同じように重要なモチーフである鳥についても、美術館にある陶器やイランの生物の剥製が飾ってある博物館から多少学ぶことができた。



麝香や沈香以外にも邪視除けに使われるエスフェンドという焚香料がある

反省点と今後の展開

反省点としては、図書館に通っているときにいくつかの写本も閲覧したのだが、語学力不足のため写本が思うように読めなかったことと、同様にインタビューについても簡単なものしかできなかったことである。

今後の展開としては、臨地で得た表現方法に関する知識（「香料」に関する知識やアッタールの詩の韻律についての知識など）をもとに、アッタールの表現方法に関する研究に邁進していくつもりである。



至るところに孔雀（アッタールの作品にも登場）左；博物館 右；公園